「よそ者」と営む村の漁

── マラウイ湖における漁撈変容 ──

中山節子

はじめに

マラウイ湖では「カンパニ」という組織による漁撈が行われている。これは英語のcompanyに由来する言葉であり，この50年ほどの間に採用された組織である。カンパニは魚網や舟などの資材一切を所有する網主と，それらを用いて漁を行う数名の漁撈者からなり，一定期間ともに出漁した後，売上金をあらかじめ定まった比率によって分配する。こういった特徴からマラウイ湖に関する先行研究は，カンパニを網主による生産手段の私有化と漁撈に関する意思決定の個人化とに結びつけ，漁撈が商業化・近代化することの証左として扱ってきた。そしてその導入の過程では，新しい漁撈技術と組織が古いものを駆逐すると論じられてきた。

本稿では，マラウイ湖における漁撈技術と組織の変容を，在来の技法の組み合わせによる漁撈技術の再編と，先住者が「よそ者」を受容するプロセスとして提示する。そして，これまでの研究においては，新しい技術や組織を受動的に受け入れただけであるかのように語られてきた人々が，実際には能動的な行為者であったことを明らかにする。

調査地であるC村はマラウイ湖中部西岸に位置し，約150世帯からなり，人口800人ほどが主にキャッサバ耕作と湖での漁撈を営んでいる。調査期間は1996年12月～2004年３月の間の計17カ月間である。

1．C村におけるウシパ漁

C村では，多様なカワスズメやギギ，ヒレナマズなどを対象として釣りや網漁が営まれており，捕獲される魚類は80方名種を超える。とりわけ盛んなのはウシパ（*Engraulicypris sardella*）というコイ科の小魚を対象とした漁である。ウシパは村人の主要な食料であり売却して現金を獲得する手段であると同時に，釣り漁の餌としても重要である。

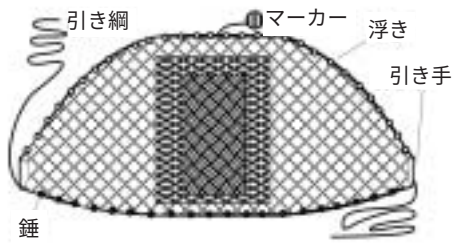
現在のC村におけるウシパ漁は，チリミラという大型の網と加圧式の灯油ランプを用いて，カンパニという漁撈組織によって行われている。C村でこの漁法と漁撈組織が一般的になったのは1980年代以降のことである。本稿で論じるのは，現行の漁法や漁撈組織がどのように形成されてきたのかであるが，最初に，その原型となった漁法や漁撈組織を紹介したい。ひとつは，現在も行われているチリミラという大型の網を用いたカワスズメ漁である。もうひとつは，松明と掬い網を用いたウシパ漁であり，これは90年代初頭を最後に消滅している。漁撈に使われる船は，現在もすべて手漕ぎの刳り舟である。

(1) チリミラ網を用いたカワスズメ漁

〔漁　法〕

チリミラは平面上では楕円形をしている(図１)。両端の木製の引き手の間には，約40～60メートルの長短２本の綱が結びつけられており，それぞれに浮きと錘がついている。網は，この２本の綱の間に張られているが，その目合いは中央にいくほど細かく，水中に広げると袋状になる立体的な構造になっている。チリミラを用いたカワスズメ漁は，２～3人乗りの２艘の舟を使って行う（図２a～c)。漁民たちはまず，湖底の地形や湖水の流れを考慮しながらカワスズメの群れがいる位置と深さを推定し，弧状に舟を進めながら網を入れる。漁民がさらに舟をこぎ続けると（図２a)，水中の網は，上部には浮きのついた綱が，下方には錘がついた綱が位置するように広がり，下方の綱は湖底の地形すれすれのところを進む。そして漁民が適切なタイミングとスピードで網を引き揚げると（図２b)，水中に広がった網によって魚群がピンポイントで捕獲されるのである（図２c)。チリミラを用いた漁を成功させるためには，魚の習性や湖底の地形，陸上の目標物を使った「山あて」の方法，日々変化する湖水の流れ，網の沈降速度と広がり方などに関する知識と熟練が不可欠である。失敗すれば魚が取れないばかりか，網が岩などにあたって大破してしまう。このカワスズメ漁の方法は1950年代に行われた調査の報告書にも記述されており（Jackson et al.［1963 : 146−150］)，漁

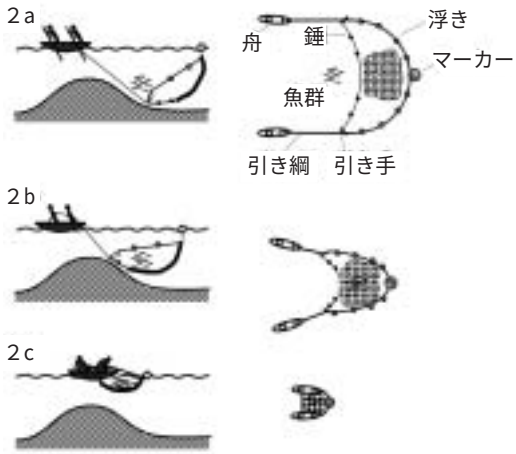
図１　チリミラ網の構造



木製の引き手に結んだ長短２本の綱の間に，工場製のナイロン網を接ぎ合わせて作ってある。上下の綱はそれぞれ約60メートルと40メートルであり，木製の浮きと石の錘が２メートルごとに取り付けられる。上の綱の中心にはさらに大きな浮きがマーカーとして取り付けられる。引き手には引き綱がついている。網の目合いは中央にいくほど細かくなっている。ウシパ漁では中央部を除いた全体に蚊帳の布が張られる。

（出所）実測値から筆者作成。

図 2a～2c　チリミラ網の操作



（出所）筆者作成。

場の位置や利用方法も当時からほとんど変化していない。

〔漁撈組織〕

この漁を行うためには４～６人が必要であり，さらに網の補修には技術と多大な手間がかかる。こうした作業や漁獲と売上金の分配は，すべて親族集団内で行われていた。しかしながら現在は継続的に出漁する場合には，後述するカンパニという漁撈組織が編成され，すべての作業と漁獲の分配の単位となっている。

(2) 掬い網と松明を用いたウシパ漁

〔漁　法〕

これは夜間に行われた漁法である。１艘の舟に３人が乗り込み，それぞれが松明と掬い網，櫂を担当する（図３a）。この漁法で最も重要なのは松明の明かりで沖から岸の近くへと魚群を誘導する技術である（図３b）。すなわち，さまざまな深度に分散している魚群を松明の明かりで凝集させつつ浅瀬へ誘導し，次には松明の炎に水をふりかけて徐々に暗くすることによって魚群をさらにコンパクトに集めて一辺が約1.5メートルほどの掬い網ですくいとる。

また，この地域の湖岸には岩礁が多く，網を入れることのできる浅瀬や，そこまで魚群を誘導できるルートが限られている。そのため，複数の舟が同時に出漁するときには，互いの魚群が混交しないように，一定の間隔を保ちながら舟を整列させなければならない。すなわちこの漁法には，漁場を共にする者同士の協調が不可欠であった。

〔漁撈組織〕

舟に同乗する３人は親子や兄弟など，ひとつの世帯におさまるほどの近親者であった。松明などの資材の調達や，出漁および漁獲と売上金の分配は近親者の間で行われていた。

図３a　過去のウシパ漁
（掬い網・松明法）

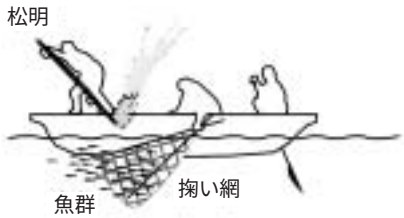
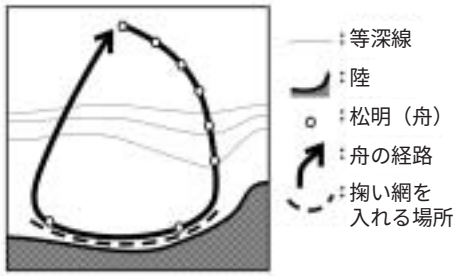


図３b　過去のウシパ漁の漁場利用（平面模式図）



（出所）聞き取りから筆者作成。

(3) 現行のウシパ漁

〔漁　法〕

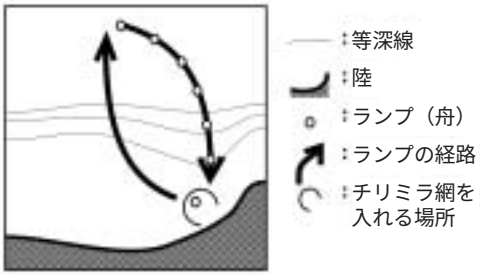
C村のウシパ漁は，現在では１艘の舟に結びつけた灯油ランプにより魚群を沖から岸へと誘導し，それを２艘の舟がナイロン製のチリミラ網ですくいとるという方法で行われている（図４a）。すなわち，上記の二つの漁法から変化したのは，光源（松明→灯油ランプ），網（掬い網→チリミラ網），網の材質（天然素材→ナイロン）だけであり，魚群を誘導するルートや，明かりがついた複数の舟を一定の間隔で整列させる方法は，松明と掬い網を用いたウシパ漁から継承しており（図４b），チリミラ網の操作技術はカワスズメ漁と同じである。

〔漁撈組織〕

現行の漁撈組織はカンパニと呼ばれている。これは，網主と４～６人の網子，ランプを操作する者１～２人，合計５～9人ほどで組織される。網

図4a　現行のウシパ漁
（チリミラ網・ランプ法）

図4b　現行のウシパ漁の漁場利用（平面模式図）



（出所）筆者作成。

主は灯油や網の補修材などの漁具や資材をすべて負担し，自分自身で出漁する場合もある。網主以外のメンバーの１人が漁撈長の役をつとめ，漁の進行や漁獲の分配をとりしきる。この漁は満月の数日前には終了し，売上金を定率で分配する。網主の取り分は半分で，残りの半分はメンバー間で等分する。

このように現行の漁撈組織の特徴は，網主との親族関係がなくても漁に参加できること，そして売上金の分配時期や，漁獲と売上金の分配の比率が前もって定まっていることである。

2．C村における漁撈技術と組織の変容過程

C村のウシパ漁には，カンパニの導入およびチリミラ網と灯油ランプへの転換という，二つの変容が起こった。その経緯を以下に記述するが，その際に注目したいのは，この変容は「よそ者」と先住者の間の交渉の結果としてもたらされたことである。

Lは，1979年に一族とともにC村に移入した。彼はタンザニアで働いていた経験があり，おそらくタンガニーカ湖で新しい漁法を学んできたのだと思われる。C村に親族がいなかったLは「よそ者」専用とされていた区画に住み，ナイロン製のチリミラ網を使った漁を始めた。

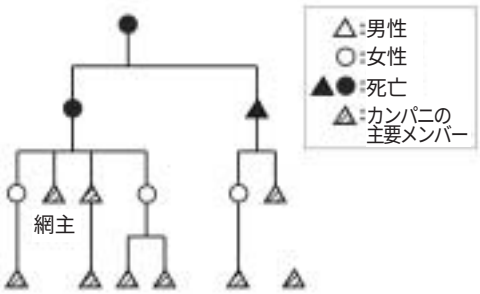
移入してきた当初のLは，旧来のカワスズメ漁を親族だけで行っていた。取れた魚の一部は先住者たちにも分配していたが，大部分の漁獲を売却した現金を親族以外に分配することはなかった。このことが先住者の間で問題となった。自分たちの村で行われている漁の利益にあずかれないのはおかしいというわけである。Lのカワスズメ漁は，ナイロン製の網を使っていたこと以外は，C村の先住者と同じく親族単位で操業しており，現金がLの親族以外に分配されないのはいわばあたりまえのことであった。にもかかわらず人々がLにクレームをつけたのは，彼がよそ者であり，効率のよい漁撈を行っていたからにほかならない。Lは人々の要求に応じて話し合いの座につき，直接に現金を分配する代わりに，先住者を網子にしてカンパニを組織することを提案した。そうすれば先住者に，あらかじめ決まった率で売上金が分配されることになる。カンパニの定率分配に従えば，Lの親族と先住者が同じ割合で網子になった場合には，先住者の取り分は売上金全体の４分の１にすぎない。しかし，ひとたび現金収入があれば，それが小さな金額であっても出漁者当人の懐にとどまることはなく，親族を中心にしてさまざまな形で循環していくものである。また，先住者たち

にしてみれば，自分たちの異議申し立てをLに受け入れさせることによって，村の地先が自分たちの漁場であることをLに承認させたことも重要であったにちがいない。

こうしてC村ではカワスズメ漁にカンパニが導入され，親族関係にないもの同士の協働が実現した。この際に友好的な社会関係を築いたLを，C村の先住者たちはウシパ漁へ誘った。当時，C村以外でもナイロン製のチリミラ網と灯油ランプを用いたウシパ漁が行われていたが，それは沖でランプによって集めた魚群をそのまま取るという，魚群の誘導を伴わない漁法であった。これに対しC村では旧来の魚群の誘導技術を活用することにより，漁場利用における協調関係を保ちつつ，松明からランプへ，そして掬い網からナイロン製のチリミラへという転換がなされた。それがC村の先住者たちがすでによく知っていた漁法を組み合わせることによって可能になったことは上述のとおりである。その後，C村の先住者のなかにも，チリミラ網を購入してカンパニを組織するものが出現するようになった。

調査中には三つのカンパニが操業していたが，そのうちのひとつの主要メンバー（３回以上出漁した者）の親族関係を図５に示した。このカンパニの漁に参加したのは合計19人であるが，主要メンバーは９人であり，その多くが網主の親族であることがわかる。しかしながら，主要メンバーのなかには網主と親族関係のない者もいた。彼は網主とは異なる村区に住み，漁ではランプ舟に乗っていた。どのカンパニの中心メンバーにも彼のような「よそ者」が１人はおり，ランプや漁撈長を担当するなど重要な役についている。これは一般に，漁に参加しない親族からの分配の要求を断りやすくし，規則どおりの現金の分配を可能にするためだ，と人々は説明する。

図５　あるカンパニの主要メンバーの親族関係



（出所）筆者作成。

おわりに

C村におけるウシパ漁の変容は，一見，当時マラウイ湖全体に波及しつつあったナイロン製の網と灯油ランプという道具，そして漁撈組織としてのカンパニという組み合わせを，単に外来者から受容したもののようにみえる。しかしそれは，在来の漁法の巧妙な組み合わせの上に成り立っていた。よそ者であったLを村に受容することを契機として，先住者たちは漁撈組織を大きく変化させ，親族以外の者との協働を実現するカンパニを導入した。同時に，すでにもっていた技術を組み合わせることにより，新たな漁法への転換を達成したのである。このプロセスは，村の地先の漁場をめぐり，誰と協働し，どのように漁獲を分配するかという，先住者側と移入者の間の交渉のうちに生起したのである。

【参考文献】

Jackson, P.B.N., T.D. Iles, D. Harding, and G. Fryer［1963］ *Report on the Survey of Northern Lake Nyasa : 1954–55*, Government Printer, Zomba, Nyasaland.

（なかやま・せつこ／
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）